

現状のなか、当大学を卒業した新任保健師の交流の機会をもうけ、どのようなことに困難を感じているのか、悩みの経時的変遷や対処方法、自己の成長のために職場や大学に望んでいることを明らかにする。

【研究方法】

1. 対象：本学を卒業して道内の自治体に就業している5年未満の保健師21名。内訳は、1年目7名、2年目2名、3年目9名、4年目3名だった。

2. 内容と方法：構成メンバーが1年目のグループ、2-3年目混合のグループ2つ、4年目のグループ、合計4つのグループに対しそれぞれ約1時間程度のフォーカスグループインタビュー（以下FGI）を実施した。研究者3人、道立保健所の保健師1人が各グループにインタビュアーとして進行した。FGIは、グループダイナミクスを用いて質的に情報把握を行う方法のひとつである。テーマを、保健師として就職してから困難に感じること、対処方法、自己の成長のため職場や大学に望んでいることとし、自由に話し合いその内容をICレコーダーに録音した。

3. 分析方法：内容の逐語録を作成し、発言からその文脈の内容をコード化しコードの意味内容が類似したものをまとめ、サブカテゴリーとした。次にサブカテゴリーを類似した内容に統合しカテゴリーとした。それらのカテゴリー、サブカテゴリーを保健師の経験年数別に並べ、更に意味内容が類似したものをまとめコアカテゴリーとした。分析は複数の研究者で行いデータの妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮：研究の主旨、拒否をしても不利益を被らないこと、匿名性の保証、内容の録音、データは研究以外の目的では使用しないことを文書と口頭で説明し同意を得た。

15) 北海道の自治体に働く新任保健師の語らいからみる困難な状況と対処方法

ーフォーカスグループインタビューを通してー

研究代表者 藤井智子 杉山さちよ 北村久美子

【研究の背景と目的】

本大学看護学科では例年10人前後の学生が北海道各地の自治体に就業している。看護系大学学士課程卒の新任保健師は自信がない、自分の成長が感じられない、実践力を求められてプレッシャーという思いを抱えていると言われて久しい。また特徴として、広域である北海道各地に新人として少人数で就職する。よって同じ悩みを持つ新人保健師が身近にいないことや仕事だけではなく生活上のストレスもある。このような

【結果】

抽出されたカテゴリーは、コアカテゴリーが6個、カテゴリーが24個、その内訳は1年目のカテゴリーは8個、2-3年目は9個、4年目は7個だった（表1）。サブカテゴリーは、1年目33個、2-3年目は52個、4年目は37個であった。

【考察】

コアカテゴリーを【 】, カテゴリーを< >、サブ

表1 新任保健師の困難な状況と対処方法のカテゴリー

コアカテゴリー	1年目保健師 カテゴリー (サブカテゴリーの抜粋)	2・3年目保健師 カテゴリー (サブカテゴリーの抜粋)	4年目保健師 カテゴリー (サブカテゴリーの抜粋)
成長したと思う	成長したと思う	保健師として成長した自覚 気分転換の方法を身に付けた	成長するきっかけとなった体験 保健師として土台が身についた
職場の中での成長		職場の対人関係の中で成長する方法を 学ぶ	職場のコミュニケーションの豊かさが 成長を促す
仕事での工夫		仕事をするうえで工夫していることが ある	仕事をするうえで工夫していることが ある
住民とのかかわり	住民とのかかわりが支えに なる	住民とのかかわりが支えになる	
今の仕事上の課題	支援は難しい 仕事に自信が無い 成長の自覚が無い 仕事が負担に思う 更に必要なことがある	難しさを感じる 自信が無い (できる先輩や同期と比較し自分 だけ出来ないと思う) 今抱えているジレンマ (多忙で目的を見失う)	今の自分に足りないこと (業務の優先度やバランスのとり方) (財政のわかる行政職員としてのスキル) 将来への展望に悩みがある
大学で強化してほしいこと	(課題の解決方法) (実践の経験)	(コミュニケーション技術) (保健事業の立案・評価)	(強くなるためのディスカッション) (技術を身につけ自信をつける)

カテゴリーを () で示す。1年目保健師では、【今の仕事上の課題】として<支援は難しい><仕事に自信が無い><成長の自覚が無い>など多くの課題が抽出された。2・3年目では、引き続き<自信が無い><今抱えているジレンマ>などの課題はあるが、【成長したと思う】、【職場の中での成長】のカテゴリー数が増えていた。4年目での課題は、<今の自分に足りないこと>として(財政のわかる行政職員としてのスキル)や<将来の展望への悩みがある>が抽出された。1年目は課題と思うことが多く成長の自覚が無いが、年数を重ねるにつれ【仕事での工夫】が増え対処していることがわかった。4年目になると<保健師としての土台が身についた>とし、一定の自信をもつことができていた。